



紙にして読む

和田竜

繊維業界の専門紙で記者をやっていた時、パソコンで書いた記事は必ずプリントアウトしてから誤字脱字の有無をチェックしていた。

パソコンの画面だけでチェックしても良さそうなのだが、不思議なことに、画面上では大丈夫だと思っても、プリントアウトして読むと、信じられないようなミスが発覚することがしばしばであった。紙でチェックすることによるミスの軽減効果は他の記者も認めるところで、全員がこのプロセスを経て記事を本社に送っていた。ただ、この効果が本当に紙によるものなのか完全な自信はない。単に記者の全員がパソコンの画面に不慣れだったせいなのかも知れない。

小説を書く際の史料は、ほとんどすべてが本か本のコピーの形をしている。最

近は、史料や論文がデジタル化されて、パソコン上で読むことができるものも結構あるが、重要な資料は紙にして読むことにしている。パソコンの画面で読んで、その資料をパソコンに保存することもできるのだが、紙の形にする。

モノを書く際の資料調べで、本の形で読むのが良いか、パソコン上で読めば済むか、話題になることがある。よく言われる本の優位性は、「本の前半か後半か、右側のページか左側のページかでざっくり記憶することができ、参考にすべき該当箇所を後々探し出す際に便利だ」というものだ。

人は本を読んでいるとき、本のどの辺りを読んでいるのか身体で覚えているもので、僕自身、小説の引用などで改めて史料が必要になった際、その記憶を頼りに、必要な箇所を探し出す。しかし、この優位性は、すべての資料がデジタル化されて、検索機能がついていけば失われちゃうもので、そうなればパソコンの画面だけで資料は読めばいいとの一応の理屈も成立してくる。

でも、僕は資料のデジタル化がより発達したとしても紙にして読むという行為を止めないだろう。紙に印刷された文字を読む意義は、検索うんぬんよりも、物



わだ・りょう●作家・脚本家。1969年大阪府生れ、広島県育ち。早稲田大学政治経済学部卒。2003年、映画脚本『忍ぶの城』で城戸賞を受賞。07年、同作を小説化した『のぼうの城』で作家デビュー、直木賞候補となり累計208万部のベストセラーに。12年には脚本を手がけた映画が公開。14年『村上海賊の娘』で第35回吉川英治文学新人賞および2014年本屋大賞を受賞。他の著作に『忍びの国』『小太郎の左腕』などがある。

埼玉会館 エスプラナードにて

質として手ごたえが格段に上だということにあり、その手ごたえの確かさが、頭や心のより深いところに知識を届かせる、すなわち理解が深まることにつながっているのだと予感するからである。業界紙の記者の全員がプリントアウトしていたのもそのせいではないか。単に楽しめばいいような情報はパソコンの画面だけでも十分だ。しかし、きちんと知識を理解し、記憶に残し、連鎖させ、アウトプットに活かすような場合、紙にすることは不可欠だろう。

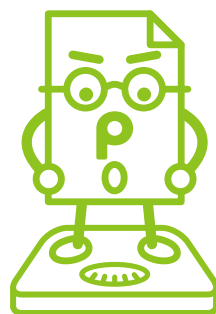
最近、デジタル教科書の導入が議論されている。僕には幼稚園に通う子供がいるが、小学校に上がって導入がなされていた場合、全部が全部デジタル化されるわけではないだろうが、デジタル化されてしまったものについては自前で、すべて紙で用意するつもりだ。

この原稿もパソコン上で大丈夫だと思っ

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

**新聞紙だって、
ダイエットしている。**

ひと昔前、1㎡当たり52gだった重さは、今や43gが主流に。新聞紙はこの30年間でなんと約2割も減量しているんです。これが人だったら…と考えると、大変さがわかりますよね。新聞紙の減量は、資源の節約や輸送費の削減、印刷のスピードアップなどにもつながっているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は7月29日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Shiro Miyake